

## 東方の三博士

——キリシタンの聖書翻訳——

ベツレヘムの厩<sup>うまや</sup>で生まれたばかりのイエスのもとへ、東方から三人の占星術の学者たちが訪れ、その誕生を祝福した。新約聖書の福音書に記され、ヨーロッパの絵画において羊飼いの訪問と同じ構図のなかに描かれることの多いこの場面は「東方三博士の礼拝」「マギの礼拝」「三王礼拝」などと呼ばれている。<sup>(1)</sup>

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱

米井力也

いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。『ユダの地、ベツレヘムよ、お前はユダの指導者たちの中で決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と行ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は

母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。(聖書 新共同訳)『マタイによる福音書』二・一―一二<sup>②</sup>

フランシスコ・ザビエルをはじめとして、十六世紀なかごろから十七世紀にかけて日本を訪れた宣教師たちにとってこの場面は重要な意味を持っていた。天使によって受胎を告知された処女マリアから生まれたというイエスを祝福する東方の三博士の姿は、教会における福音書朗読のために日本語に翻訳された。一五九一年、天正遣欧少年使節の帰国とともに来日した直後の宣教師マヌエル・バレットによって筆写された『バレット写本』ではつぎのように訳されている。バレットの先輩にあたる宣教師たちの翻訳の蓄積に基づくものである。

エロデスと申す国司ゼルザレンを治めらるる時代に、ベツレンに於いてゼズス誕生なされ給へば、即ち東国より三人の国司ゼルザレンへ来たられ、「ジュデオ(ユダヤ)の帝王は如何なるところに生まれ給ふぞ東に現はれける星のしるべを見るによつて拝み奉らん為に来たる」と申されければ、エロデスを初めとしてこれを聞きけるゼルザレンの者ども大きに仰天しけるなり。

その時サセルグウテ(祭司)の司スキリバ(律法学士)を呼び集めて「キリシトはいづくに誕生あるべきぞ」と問はれければ「ジュデアのベツレンなるべし」と、「その故はポロヘエタ(預言者)『いかにジュデアの国ベツレン、ジュデアの郡の中に小さきにあらず、汝よりイスラエルの人数を計らひ給ふべき大將出で給ふべし』と書き置かれける」と答へけるなり。さればエロデスひそかに東国の国司を請じ、星のしるしを見出だされる時分を悉く尋ね、「されば疾く御出であつて、若君を尋ねあひ給はば、知らせ給へ、我も参て拝み申すべし」とてベツレンへ遣はし申さるるなり。三人の国司ゼルザレンを出で給へば、東国より見えたる星、若君のまします家まで導きて留まりければ、三人の国司かの星を見て大きに喜ばれ、即ち御産屋に参り給ひ若君と、御母サンタ・マリヤを見つけ奉られ、各々ひれ伏して、礼拝いたされ、宝の篋を開き黄金、ミルラ(没薬)、エンセンゾ(乳香)この三種を捧げ奉るなり。然れば夢中にエロデスに帰るべからずとのおん告げを蒙むられ、別の道より本国に帰られけるなり。『バレット写本』「マタイによる福音書」二・一―一二<sup>③</sup>

この翻訳は、カトリックの唯一の聖典と認められていたラテン語訳聖書(Vulgata)を定本とすると考えられるが、原文と比較する

と「占星術師」を意味する magi (magus の複数形) が「国司」と訳されているところに大きな特徴がある。<sup>(4)</sup>これはいったいどのような事情によるものだろうか。

一一

東方の三博士は『バレット写本』では「国司」と訳されたが、それ以外のキリシタンの書物では「帝王」あるいは「国王」と訳されるのが一般的だった。「最初にマグたちを王であると解釈したのは、キリスト教著述家テルトゥリアヌス(一六〇頃〜二三〇)である」<sup>(5)</sup>(ジエイムズ・ホール『西洋美術解説事典』)とあるように、古くから占星術師を「王」と解釈してきたヨーロッパの神学に基づく翻訳にはかならない。「国司」という訳語はおそらくこの延長上に位置するものだろう。

たとえば、『サントスの御作業』(一五九一年)では、トマスがかつてイエスの誕生を祝福した「三人の帝王」の国へ下ったと記す。

サンキリソストモの曰く、「このアポストロ(使徒)はゼズキリシトの御誕生より十三日目に参拝仕られたる三人の帝王の国へ下り給ひて、その人々にも御授けを授け給ひすなはちその人々よりこのアポストロ(使徒)の御教へに力を添へ給ふなり」と。『サントスの御作業』「サントマス伝」<sup>(6)</sup>

また、『ヒイデスの導師』(一五九二年)では los estrangeros (異邦人)、 aquellos sanctos Magos (聖なる博士たち) がともに「三人の帝王」と訳されている。

此に依つて御作業の中に、この二様の事を合はせ給ひて、或時はデウスの御威光に当り給ふことを現じ給ひ、或時は御役に当り奉る御謙り、御貧窮の所作などを現じ給ふなり。譬えば、御母の御胎内に宿り給へども、是れ人間のわざにあらず、只スピリツサント(聖霊)よりの御奇特のみ也。御誕生あると雖も、御母はビルゼン(処女)にてまします也。既に生れ給ふと雖も、新しき星を以て御約束の御扶手と頭はし給ふ也。サントアウグスチニヨ、此を指して曰く、東国の三人の帝王 (los estrangeros 異邦人) 尋ね申さるゝ若君はこの御方ぞ。天に見知られ給ふと雖も、地にては尋ねられ給ふ也。天にかゝやき給ふと雖も、地にては隠れ給ふ也。東国には見え給へども、ジユデヤ(ユダヤ)の国には尋ねられ給ふなり。この世界に於ては未だ物も宣はざれども、天に於ては宣示をなし給ふこの幼君は、いかなる御方ぞ。如何に人々、産衣に纏はれ給ふを見て不審するに於ては、天のアンジヨ(天使)の謡を聞き奉れ、生れ給ふ厩をつたなき所と思ふならば、天にかゝやく新しき星を見よ、卑しき事を信ずる如く、高き事をも信ずること、肝要なり。

〔『ヒイデスの導師』〕

その上、御主の御誕生の時は、新しき星の現はるゝを、三人の帝王 (aquellos sanctos Magos 聖なる博士たち) 御覧じ給ひて、シエルサレンへ赴き給ひ、厩の中ベレセピヨ (馬槽) にまします若君を、誠のデウス也とひれ伏して拜し申さるる也。この新しき星の奇特に御パシヨン (受難) の時の日輪の奇特を比するに於ては、天地雲泥の差別なり。御右にクルス (十字架) にかゝりたる盗人、この奇瑞を見奉りて、御主ゼスキリシト、デウスにてましますと信じ奉るもの也。此等の事を能く思案するに於ては、即ち肉眼を以て見るよりも、ヒイデス (信仰) の眼を以て見ることは、愈よ強かるべし。クルス (十字架) にかゝり給ふ時、カルワルヨにゐる人々はこの御奇特を見て、胸を打ち、デウスをあがめ奉る也。御主の御言葉の如く、ビルゼン (処女) の子クルス (十字架) に於て、我は如何なるものぞといふことを知るべしと宣ふ也。此を以て、御主ゼスキリシトの御パシヨン (受難) はヒイデス (信仰) の障碍とは微塵もなることなし。却てヒイデス (信仰) の証拠の中に第一の証拠なり。これに又世界の人々の悪業の改めを添ゆるに於ては、この御証拠は深く甚しきことなるべし。〔『ヒイデスの導師』〕

さらに『ヒイデスの導師』のつぎの箇所では、原典に該当する語が見られないにもかかわらず、「三人の帝王」を繰り返して用いた。ここでは、イエスを「若君」、ヘロデを「帝」としながら、東方の三博士を「帝王」と把握している。

されば御主ゼスキリシトの御出世は、かのエロウデスが時代なりしことは、天が下に隠れなきことなり。その故は、若君の御出世は今の時代なりと、新しき星に導かれて、三人の帝王拜し奉らん為に、参られたる時、このエロウデス、三人の帝王の言葉を聞いて、「此は不思議なり」と怪みたるもの也。その故は、「ジユデヤ (ユダヤ) の帝は我なるに、余に二君いかでかあるべきや。さらばこの若君を害せん」とて、数多のインノセンテス (幼子) を殺さるゝもの也。是れ即ちかのエロウデスはジユデヤ (ユダヤ) の帝王の筋目にあらざるが故に、ジユデヤ (ユダヤ) の帝王の誕生と聞き、あわてて此等の悪行をなすものなり。然れば、此等の事は早一千五百年以前以前の事なれば、いかでか御出世を疑ふべきや。〔『ヒイデスの導師』〕

また、『ギヤビベカズ』(一五九九年) においても los sabios y poderosos (智者と権力者) が「国王」と翻訳されている。

去ば貧なるばかりにて善にはあらず、只其貧を大切におもふ事善となる也、自由の上より身に貧を求むる事はきりしとに似奉る者也、財の源にて在ますきりしと我等に對し給ひて貧を極め給へば也、生得貧にして快く貧を堪へ持ざる宝を賤しむる事も又其貧を善となす也、即貧人は貧をもてきりしとに似奉ること

く福人も慈悲を施すを以てきりしとにあやかり奉る者也、御主御誕生の時は貧なる牧士のみきりしとを拝み奉りたるに非ず、

國王も三人ともに (Los sabios y poderosos 智者と権力者) 宝祿を捧げ奉りて拝し給ふ者也、汝おほくの財宝を持にをひては貧人に施す事を本とせよ、貧人に渡す財は皆御主きりしとの御手にうけとり給ふ者也、是を少しも疑ふ事なかれ、今施すべき宝は汝が不退の住所となる天の上に積置給ひて報じ給ふべき者也、現在にて是を天に運び置ずんば行くさきにて何を持べきや、隨身して行く事叶はず、竟に失ひ果べき財宝を争か真の宝とは云んや、只あにま(魂)の善根のみ真実の財宝也、色身果ればあにまとともに此善徳も随ひ行き自由の上よりうけがはざれば誰も奪ひとる事叶はざる者也、(「ぎやどべかどる」<sup>8</sup>下)

貧しい状態で生まれたイエスに「牧士」(羊飼)だけでなく「国王」さえも礼拝したように、貧人に施すことが天に財宝を積むことにはかならないという主張である。

三

こうした翻訳はイエズス会に属していた宣教師たちに共通する解釈に基づいている。たとえば、遠藤周作『沈黙』の主人公ロドリゴ神父のモデルであるジュゼッペ・キアラは上陸後まもなく捕縛され、拷問を受けて棄教したのち、岡本三右衛門という日本名を与えられたが、その調書のなかでイエスの誕生についてつぎのように論じた。

「ジュデアノ国「エロウテウス」ト申帝王ヨリ「ゼスウス」ヲ殺シ度所存ニ付、往昔ノ經典ニ、「デウス」ヘレント申ス所ニテ世界ヘ出生可レ有人ト成給ヘ(ヒ)人間ノ扶タマハントノ時分ニハ必天ニ客星ノシルシ有ルベシト有レ之。アラビヤ・タリシス・サハ、此三ヶ国ノ帝王タチ三人トモニ天文ノ学者ニテ御座候、此三人トモシルシノ客星ニ心ヲカケタマフ所ニ、客星見ヘ申ヲ見知り、三所ノ国々ヨリテン々々ニ出タマフニ、星近ク成申候時分、三人行逢頭ニツトノタマフ。其時分「シユテア」ノ帝王ヘ三人ノ帝王通(達)行逢タマイ、「エロウテウス」ニ問給フハ、世界ノ御扶手御出生有シヲ定メテ拜ミ可レ有ト尋給ヘハ、イヤ左様ノ義不レ存候、三人ノ御衆ヲカミ給ハ、又之ヘ必ズ御出候テ教ヒ(ヘ)給ヘト被レ申候。即チ三人ハ其所ヲ出テ星ヲシルベトシテ尋ネアテ給ヒ、「ゼズウス」ヲオガミ被レ

申候。「エロウテウス」ガ又之レへ御出候テ、教タマヘト被レ申候シハ、遠国ニ有レ之ナラバ我威勢有間敷候間、所ヲ聞定メ殺サントノ下心ニテ候。然所へ「テウス」ヨリ「アンジヨ」天下ダリ、三人ノ衆へ宣フハ、必々「エロウテウス」ヘシラセタマハストモ、スクニ帰国シ給ヘト示シタマフ間、道ヲ替テ面々直ニ帰国イタサレ候。夫レヨリ「サンタマリア」ハ「ゼズウス」ヲイダキタマヒ、「エジツト」ト申他国ヘウツリタマフ。「エロウテウス」ノ下知トシテ、「ヘレン」ト申所ノ近辺ニ「ゼズウス」可レ有レ之ト存候テ二歳ヨリ内ノ小児ヲミナ殺シ申候。〔岡本三右衛門筆記〕<sup>9)</sup>

また、一七〇八年単独で来日したイエズス会士ジョバンニ・バッチスタ・シドッチも東方の三博士を「君」ととらえていた。新井白石の『西洋紀聞』には、ところどころ白石の解釈を挿入しながらシドッチの言葉が書き留められている。

アラビア・タルソ・サバ、三国の君、エイズスが生れし夜に当りて、客星現れしを覩て、聖人ありて生れし事をしりて、をの／＼国を出て、其所をもとむ。「アラビアは、今アジアの地方にあり。タルソ、サバ、共にある所をしらず。漢訳共に未詳。」三国の君、同じき所にゆきあひて、共にジユテ(デ)ヨラの君

エローデスに見えて、此事を問ふ。エローデス其事をしらず。其人をもとめ得ば、必(ず)我がために告(げ)知らすべしと約す。こゝをさりて、行程十三日、へ(べ)イテレウンに至るに、彼星<sup>か</sup>かしこの上にあたり。つるに其駅にして、エイズスを拜する事を得ぬ。アンゼルスありて降りて、三国ノ君を戒むるに、エイズスの事をもて、ジユテ(デ)ヨラの君に告る事あるべからずといふ。これ彼こゝろにいむ事あるによれる也。マリヤつるにこゝをさりて、エヂツプトにゆく。ジユテ(デ)ヨラの君、三国の君の其事を報ぜざるをあやしみ、明年、国中の幼児、生れて二歳なるもの、数万<sup>モウ</sup>を索て、ベイテレウンに殺す。

〔西洋紀聞〕<sup>10)</sup>

宣教師のこのような解釈は、近世初期の迫害後はるかな時間を経た潜伏キリシタンにも受け継がれていた。十九世紀に書写され、明治の世にも保持されていた『天地始之事』という書物においても三博士は「帝王」と記されたのである。<sup>11)</sup>

キリシタンが「帝王」という訳語を用いたのはヨーロッパの伝承にしたがったものだった。『バレット写本』では、博士来訪につづく幼児虐殺の場面、「されば、エロデス三人の国司よりなぶられると心得て、大きに怒をなし国司に尋ねける時分を思ひ合はせベツレンを先としてその外の近所まで二歳よりうちの童部を尋ね殺さる

るなり」(「マタイ福音書」二・一六)というところで、「国司」に「帝王」という注を加えている。<sup>(12)</sup> ここにおいてもヨーロッパの伝承が意識されていたことはまちがいあるまい。

四

しかし、「国司」と「帝王」では異なることも事実である。『日葡辞書』(一六〇三年)では「国司」に *Visorei, ou governador.* (副王または総督) というポルトガル語があてられており、*Rey, ou emperador* (国王または皇帝) と訳される「帝王」とは重ならない。<sup>(13)</sup>

じつは「国司」と訳されたのは東方の三博士だけではない。三博士礼拝の場面の冒頭に「エロデスと申す国司ゼルザレンを治めらるる時代に」とあるように、ヘロデ大王も「国司」とする。ラテン語訳聖書では *in diebus Herodis regis* (ヘロデ王の時) とあり、『羅葡日対訳辞書』(一五九五年) 補遺の定義 *Rex, gis. Lus. Rey. Iap. Teiō.*<sup>(14)</sup> にしたがえば、「帝王」がふさわしいにもかかわらず、「国司」と訳したのである。

これは、おそらくローマ皇帝との差異を明確にするための措置だろう。『バレット写本』の「ルカ福音書」三・一では「チベリヨ カエザルと申す帝王即位あってより十五年に当たってポンシヨ ピラツスはジュデオ(ユダヤ)を守護し、エロデスはガリレアその次男

ヒロポイツレア トラコニチデス国のテトラルカ リザニヤはアビリナのテトラルカを守護せられ」とあるように、ローマ皇帝と分国の王とが区別されている。すなわちローマの分国であるユダヤの地をつかさどる *rex* は「帝王」ではなく、「国司」こそが適訳だとキリシタンの宣教師は判断したのである。それでは、イエスはどのよう<sup>(15)</sup>に形容されるべきだったか。

『バレット写本』の東方の三博士の来訪の場面では、博士たちは生まれたばかりのイエスについて「ジュデオ(ユダヤ)の帝王は如何なるところに生まれ給ふぞ」と言ったが、のちの十字架にかけられる直前の場面でピラトに「御辺はジュデオ(ユダヤ人)の帝王か」「しからは帝王にてましますや」と問われたイエスは「我を帝王とは御辺申さるるなり」と答えるにとどめた。「我が身を帝王と顕はす人は皆セザル(皇帝)の朝敵なり」(「ヨハネ福音書」九・四〜二五) という民衆のことばにあきらかなように「帝王」と自称すればローマへの反逆者という烙印を押されるからである。

ピラトス「十ゼズスに」「御辺はジュデオ(ユダヤ人)の帝王か」と尋ね申されければ、ゼズス「その糺明は他人の訴へか私の不審か」と宣ひければ「宣へば」、ピラトス「我ジュデオ(ユダヤ人)に非ず。御辺の人数ポンチヒセスより渡しければ何ごとをし給ふぞ」と申しければ、ゼズス「我が国はこの世界

より出でずその故はこの世界より出づる国なるに於いてはジュ  
 デウに渡すまじきために我に仕へける者ども障ゆべし、さりな  
 がら我が国はこの世界より出でず」と宣へばピラトス「しから  
 ば「さあらば」帝王にてましますや」と申されければ、ゼズス  
 「我を帝王とは御辺申さるるなり、この世界に生まれ来たるこ  
 とはまことを顕はす証拠に立つべきためなりまことを用ゐる  
 「用ゆる」輩は我が言葉を聞きなり」と答へ給ふ。(『パレット写  
 本』「御パシヨン」、「ヨハネ福音書」一八・三三〜三七)<sup>(15)</sup>

イエスはその罪札に、Jesus Nazareus Rex Iudaeorum (ユダ  
 ヤの王、ナザレのイエス)<sup>(16)</sup>と書き記され「帝王」として処刑された。  
 西洋の絵にもこのことばの頭文字NRIが描かれることがすくなく  
 ない。

されば悪人ともにましますべき「罪人の如くに思はれ、罪人の  
 うちに加へられ給ふ」とイザヤスの書かれたるポロヘシヤ(預  
 言)を遂げ給ふなり。その時ピラトス小さき板に「ナシ」ナザ  
 レトのゼズスジュデウ(ユダヤ人)の帝王なりとエブライカ  
 (ヘブライ語)、ゲレカ(ギリシア語)ラチイナ(ラテン語)こ  
 の三様の字を以て「+板に」書きつけゼズスの御クルス(十字  
 架)の上に打ち付けらるるなり。されば諸のサセルダウテ「+

ス」(祭司)ピラトスの許に行いて「行きて」「帝王と書き給ふ  
 べからずその身ジュデウ(ユダヤ人)の帝王と云はれけると書  
 き給へ」と申しければ、ピラトス「書くことを書く」「早や書き  
 出せることを書きたり」とありけるなり。(『パレット写本』「御パ  
 シヨン」、「ヨハネ福音書」一九・一八〜二二)

ピラトに対してイエスが言った「我が国はこの世界より出でずそ  
 の故はこの世界より出づる国なるに於いてはジュデウ(ユダヤ人)  
 に渡すまじき為に我に仕へける者ども障ゆべし、さりながら我が国  
 はこの世界より出でず」ということばはかれが所属する「我が国」  
 が「この世界」に属していないことを強調している。イエスにとつ  
 て「我が国」とは「天の国」にはかならないからである。やがてイ  
 エスは「帝王の中の帝王」と呼ばれることになる。

『サントスの御作業』の「サンパウロ伝」におけるパウロと皇帝  
 ネロの会話には「帝王の中の帝王」ということばがくりかえし用い  
 られた。

サンパウロ ローマにまします時、御法談を述べ給ふに、貴賤  
 群集して聴聞し奉りしに、パトロクロといふ若き人家の二階の  
 窓より聞かれけるが、それより落ちて死せらるるなり。その人  
 一段叡感深き人なるによつて、帝王大きに悲しみ給ふなり。そ

れをアポストロ（使徒）知り給ひて「その死人を具し来たれ」と宣ひ、オラシヨ（祈り）し給へば、たちまちよみがへられたるものなり。しかるをサンパウロ ネロへ遣はし給へば、その由奏すといへども、「この者は既に死すと聞きぬ。また死人の再来なれば、いかに」と恐れて禁中に入れられざりしを近臣苦しからずと諫むるによつて、参内して王の御見参に入りたるなり。その時ネロ「汝はまことに生きてありや、いなや」と問ひ給へば、「まことに存命つかまつる」と奏す。ネロの曰く、「誰人のよみがへされけるぞ」と。答へて曰く、「帝王の中の帝王、にてまします御主ゼズキリシトのよみがへし給ふ」と言へり。ネロこの言葉を聞かれ、「そのゼズキリシト帝王の中の帝王、たらば、この世をたもつ帝王をも進退せらるべきや」と面を打つて「汝もそれに仕ゆるやいなや」となり。答へて曰く、「しかり、我をよみがへし給へば、その君に仕へずして、誰にか仕へん」と奏す。人々ネロの風情を見限り、キリシタンの最眞して「かの者の申す分その道理歴然なり。しかるを曲げて理不尽の御沙汰そのいはれなし」と言へば、ネロ大きに怒りその諫めをなしける者どもをはじめとして、籠者させその分国にあるほどのキリシタンを搦め来たつて籠者となし、苛責をなせとの勅詔を出ださるるなり。それによつてサンパウロをもキリシタンの大将のごとく搦め来たるなり。アポストロ（使徒）、ネロの

前に出で給へば、「いかに汝帝王の中の帝王の臣下たらば、何とて我が手には属しけるぞ？ かねては又わが臣下を汝の帝王の臣下に取り加ゆることはいかに」と言へば、アポストロ（使徒）答へ給はく。「ただ君一人の臣下のみにあらず、世界を廻りて数多の人々を奨め了んぬ。我等が帝王はその御奉公の勸賞として長く御恩を賜はるものなり。君もかの大臣となり給はば、長く帝王にてましますべし」と、ネロ御返事を聞き、すなはち「あるほどのキリシタンを焼き殺し、この大将が首を誅せよ」と下知をなす。それによつて官軍等情も知らず、数限りなきキリシタンを生害せしものなり。この暴悪を見てゼンチヨ（異教徒）までも眉をひそめ一揆同心して内裏をとり囲み、「この苛政をば静め給へ、この生害を加へらるる者どもは皆ローマの累世の民なり、帝の民にあらずや」としきりに訴へ申すによつて、且は天下の人口を恐れ、殘党をばしばらく籠者させ、細かに糺明すべしとて、誅罰をば止め了んぬ。（『サントスの御作業』「サンパウロ伝」）

「サンマテウス伝」のなかにおさめられたエピゼニヤという名のキリシタンの女性に恋慕の情を抱いた「国司」を使徒マタイが諫める場面では、その女がみずから天上のキリストの妻と思ひ定めてゐることを「エピゼニヤはもろもろの帝王の中の帝王にてまします

デウスの御妻と定められ、一世不犯の願を立て給ふ」と述べている。「帝王の中の帝王」と同じ意味だが、「デウスは帝王の上の帝王 (Rey de los Reyes)」、將軍の上の將軍、親の上の親、善人の上の善の源、恩の与え手の上の恩の与え手にてましませば也」(『ヒイデスの導師』)のように「帝王の上の帝王」とあらわされることもすくなくない。

このほか、「ナツウラの上の帝王」はかりましまさぬ帝王」「真の帝王」「天の帝王」という表現も用いられたが、すべて世俗の権力を超越した神の表象であることはいうまでもない。殉教者サンタ イネスが拷問を受けながら叫んだ「キリシトより外に別の帝王ましまさず (No ay otro Rey sino Christo)」、この君の対し奉りて、仮令千度百度殺さると云ふとも、心中よりこの御主をとり放し奉り、貴き御名を言葉にて唱へ奉らぬ様に計らふ事も叶ふべからず」(『ヒイデスの導師』)という決意も至高の存在であるイエスへの帰依をあますところなく示していると言えよう。

時代はエワンゼリヨ(福音)の始まる時分なれば、未だ御教の力は弱く見え、世間よりは卑しむるに、羊の如く柔軟にしてましまし、数万のキリシタンを籠者となし、又は害すれば、その血は大河の如く流るゝほどの責めをこらえ給ふと雖も、少しも負けず、弱り給はざる也。しかのみならず、尚ほ不思議なる事

は、エケレジャ(教会)は攻められ給ふほど愈よ繁栄し、強まり給ふ也。初はジュデヤの一箇国の内に初まり給ふと雖も、それより世界に栄え給ひて繁昌し給ふ也。ローマの帝王は一天世界を掌に握り、この掟を、様々の攻めを以て亡ぼさんと歎かれしと雖も、終に叶はず、却てかの帝王もエワンゼリヨ(福音)の御威光に負け、クルス(十字架)にかゝり給ふ真の帝王にてまします御主ゼスキリシトに (al reyno del crucificado) 従ひ奉らるゝ也。其よりローマの帝王は仏神を棄て、真のデウス真の御主にてましますゼスキリシト (su verdadero Dios y señor) を敬ひ申さるゝ也。(『ヒイデスの導師』)

「ローマの帝王」のキリスト教への改宗を論じたこのような記述において用いられた「真の帝王」ということばは、世俗の権力を卓越したイエスの存在を強調するものといつてよい。『バレット写本』のなかで東方の三博士に冠せられた「国司」という語は、このように位置づけられたイエスの下位にあることを示すものでもあった。<sup>(1)</sup>

## 五

ここで注目しなければならないのは、キリストバン・フェレイラが沢野忠庵の名で書いた『頭偽録』において、東方の三博士を「帝王」と呼ぶことに疑義を呈していることである。『頭偽録』は、そ

の題名が示すように、キリシタンの教えの「偽」を「頭」わすことをその目的とするものだった。

「ナタル」(セスキリシトタン生ノ日ナリ)ヨリ十三日目ニ、何レノ国ヨリトハ不知、東ノ方ヨリ「マコス」(トハ学匠又博士ノコトナリ)三人「シユテヨ」ノ国「セルサレン」ノ都ニ上リ、生レ給フ「シユテヨ」ノ帝王何クニ在マサヤ、其身ノ星ヲ東國ニテ見マキラセ、可レ拜タメニ上タリト申ケレバ、「エラウテス」ト申其国ノ帝王、此由ヲ聞給ヒ、其義ニテアルナラバ「ヘレン」(セスキリシト誕生ノ処ナリ)へ行、其子ヲ尋ラルベシ。尋合給ハバ我ニ知ベシ。其時我モ往テ可レ拜ト申サレケレバ、三人ノ者、此由ヲ聞、「セルサレ」ヲ立テ往ケレバ、東ニテ見タリシ星、爰〔此処〕ニモ見エケレバ、其ヲシルベトシ、「ヘレン」へ行、彼洞ノ内ニテ「セスキリシト」ヲ見付、ミイラ(トイヘル菓ナリ)、乳香、金ヲ捧ゲガマレケル也。サテソレヨリ「セルサレン」ハハ不レ婦シテ、路ヲカへ、本国へ帰ラレケレバ、「エロウテス」三人ノ者ドモニタラサレタルトテ腹立シ、人数ヲ遣シ、「ヘレン」ハ申ニ及ズ、近郷近里ニ二三年前ニ生レタル少キ者ヲ不レ殘刺殺サレタル也トイヘドモ、是又実シカラザルコト也。(『頭偽録』<sup>18</sup>)

フェレイラは注釈を加えながら福音書の物語をこのように略述した後、どのような点で「実シカラザルコト」であるかを列挙する。

先ズ三人ノ者ノ本国ハ慥ニハ知レザレドモ、大方「アラビヤ」ノ国ト聞エタリ。然バ「シユテヤ」ヨリハ数百里アリシ国ナレバ、十三日ノ間ニ「セルサレン」マデ尋行ベキコト実シカラズ。鬼利志端ノ学匠ハ、此三人ノ者何レモ帝王也ト教ケレドモ、是又道理ニ違フ虚言也。「マゴス」ト云ヘル詞ノ心ハ帝王ト云ヘル言ニアラズ。只学匠又博士ト云ヘル心也。其上帝王ナラバ、三人ノ国各別ナルベシ。サアルトキンバ、ナタルノ日出来タル星ヲ見テ互ニ出合、ワズカ十三日ノ間ニ国ヨリ「セルサレン」マデ尋行コトアルベキ道理ニアラズ。其上「セルサレン」ニテ生レ給フ「ジュデヨ」ノ帝王イツクニ在サヤト問ハレケル時、「セルサレン」ヨリ「ヘレン」マデハ纔ニ三里バカリノ路ナルニ、「エロウテス」帝王、人ヲモ付ズシテ通サルベキ義ニアラズ。又三人ノ者帝王ナラバ、「ヘレン」ヨリ本国へ帰ルサ、何トシテ其隠レアルベキヤ。「エロウテス」三人ノ「マコス」ニタブラカサレタルト心得テ、「ヘレン」ノ洛中洛外ノ少キ者ヲ殺サント巧マレケルコト聞エケレバ、「ジヨセフ」ト「マリヤ」驚騒ギ、「キリシト」ヲツレ、「エジツト」ノ国へ逃去リ、彼国ニ六七ヶ年ヲ送ラレケル。「セスキリシト」実ノ「テウス」

ニテ万事叶フ体ナラバ、争カ「エロウデス」ヲ怖レ、カクアリケルヤト問ヘバ、ソレハ鬼利志端、法度アル時ハ、イヅクヘ逃隠レテモ不<sub>レ</sub>苦コトヲ教ヘンタメノ謀也ト鬼利志端答ルナリ。如<sub>レ</sub>此ノ物語モ、皆以テ作リ事之作業ト聞エタリ。(『顕偽録』)

東方の三博士を「帝王」とする解釈は「道理ニ違フ虚言」であり、さまざまな観点から見ると、三博士の礼拝という物語は「皆以テ作リ事之作業」にすぎない、というのがフェレイラの批判である。「マゴス」ト云ヘル詞ノ心ハ帝王ト云ヘル言ニアラス。只学匠又博士ト云ヘル心也」とフェレイラの言うとおり、たしかに Magus という語そのものに「王」という意味はない。『羅葡日対訳辞書』にも、Magus, i. Lus. Sapiente. Iap. Chixa. Item, Feiticeiro. Iap. Facaxe, vonnhöji. とあるように、もともとふさわしい訳語は「智者」あるいは「博士」「陰陽師」であった。

キリシタンの翻訳において、なぜ「博士」という訳語が採られなかったのか。マギを帝王とするヨーロッパの伝統的な解釈に基づく「帝王」や「国司」を選んだのは、「博士」という日本語のもつ意味を回避する必要があったからではないか。

まず、『羅葡日対訳辞書』の「陰陽師」という定義、あるいは「博士、ハカセ、陰陽士也」(『文明本節用集』)という定義からわかるように、中世から近世にかけて「博士」という語は「陰陽の博

士」の意に用いられ、「陰陽師」を意味していたため、イエスの生誕を祝福する東方の三博士の訳語としてふさわしくないと判断されたことが推察できる。宣教師が仏教とならんで陰陽道を「偶像崇拜」ととらえ敵視していたことは、たとえばコリヤード『懺悔録』(一六二三年)に神への信仰がゆらいだ告白として「また一度、身が息子が深う煩うた時、その難儀・逼迫に窮って、キリシタンの心で一心不乱にその子が命を扶かり永らゆる様にデウスを頼みまらしたれども、その益がござらいで、死ぬるほどの煩ひや否やと知る為に算を置きまらした」という例があげられていることから明らかである。「算を置く」とは陰陽師の占いにほかならない。『日葡辞書』において「博士」は「陰陽師」とともに、Feiticeiro, ou aduinho. (呪術師、または、占い師)と定義されるように、「博士」とは「魔術」や「魔法」を駆使する存在だった。

## 六

しかし、それだけではない。キリシタンの作成した書物にあらわれる「博士」ということばは、陰陽師をあらわすだけでなく、聖書や聖人伝の登場人物の訳語としても常にキリシタンへの敵対者を意味していた。

たとえば、『ヒイデスの導師』では、旧約聖書「出エジプト記」の「アロン〔モーセの兄〕が自分の杖をファラオとその家臣たちの

前に投げると、杖は蛇になった。そこでファラオも賢者や呪術師を召し出した。エジプトの魔術師もまた、秘術を用いて同じことを行った。それぞれ自分の杖を投げると、蛇になったが、アロンの杖は彼らの杖をのみ込んだ」(『聖書 新共同訳』)という記述にもとづき、*los encantadores* (魔術師)を「博士」と訳しているのである。

その上モイゼスの鞭は蛇に变じ、ハラオの博士等、魔術を以て現じさせたる蛇 (*las otras serpientes que los encantadores auian hecho con sus varas*) を尽く吞むもの也。モイゼスの蛇は、罪人の如く畏るべき姿と、クルス(十字架)の上に於て見え給ふ御主ゼスキリシトのヒグウラ(予表)也。博士の蛇は罪の譬なり。モイゼスの蛇、博士の蛇を吞みたる如く、御主ゼスキリシト、我等が罪科を滅亡し給ふもの也。我等が科を何と様に御身の上に受けかゝり給ふぞと申すに、此は我が科なりと思召すほど、受けかゝり給ふもの也。(『ヒイデスの導師』)

また、『サントスの御作業』『サンペテロ伝』には、新約聖書「使徒言行録」に「この町に以前からシモンという人がいて、魔術を使ってサマリヤの人々を驚かせ、偉大な人物と自称していた」と記された人物が登場する。

その時代にシマン マゴといふ博士あり。魔法をもつて種々の神変を現するが故に、いづくにもその隠れなき者あ(な)り。然るをローマのエンペラドル(皇帝)御成敗を加へられんために、追放の官人下し給へば、すなはち擲めて来たるによつて、籠に入れられければ、その籠の中にも種々の奇特をするによつて、籠より出ださるのみならず、結句人々よりデウスのごとくに崇敬せらるるなり。後にはエンペラドル(皇帝)、クラウヂヨまでも信じ給ふなり。そのエンペラドル(皇帝)彼が木像を大きに作りチブレといふ河のほとりなる諸国往返の道辻に立て置き給ひ、「これはシマン マゴといふ貴き人の御影なり」と額を打てり。(『サントスの御作業』『サンペテロ伝』)

このシモン・マゴスという名は『黄金伝説』のさまざまな場面で出てくるのだが、常に聖人たちの妨げをなす。注意しなければならぬのは「マゴスあるいはマグヌスは、魔術師の意」<sup>20</sup>だということである。すなわち、ラテン語訳のうえではこの「博士」は *magus* であり、東方の三博士と同じ職掌についていたのだが、その果たす役割のちがいによってキリシタンの翻訳では訳し分けたのだった。極端に言えば、数ある *magus* (魔術師) のなかで東方の三博士だけがキリシタンの側にたつ特権的な位置を与えられていたのであり、そのほかの博士はすべて敵視されていたといってもけ

して過言ではない。

『サントスの御作業』には、シマン以外にも魔術師が頻繁にあらわれるのだが、彼らはさまざまな「術」を用いて聖人たちの前に立ちはだかる。悪魔を意味する「天狗」と連携する点でもあきらかに聖人たちの敵対者である。

博士大きに怒り天狗の術をもつてヒレトが全体すくみて、歩行も叶はぬやうにして、「汝がジャコブ汝を解くこと叶ふや否やを今知れ」と言へり。〔『サントスの御作業』「サントジャコブメヨル伝」〕

博士術道をもつて天狗を招き、「アポストロ（使徒）と、ヒレトを擲めてここに来れ」と下知す。〔『サントスの御作業』「サントジャコブメヨル伝」〕

博士申しけるは、「……我又魔術を以て妄念をおこさせ奉るべし。〔『サントスの御作業』「サンバルランとサンジョサハツ伝」〕

かの博士愛着の魔法を行ひかくるを以て御心とがの道に燃え立ち給ふといへども、オラシヨ（祈り）を以て防ぎ給ふなり。

〔『サントスの御作業』「サンバルランとサンジョサハツ伝」〕

博士これを見て大きに怒り、魔術をもつて毒蛇毒龍をその所に集むるなり。その時帝王アポストロス（使徒たち）を請ぜらるれば、アポストロス（使徒たち）その毒蛇毒龍を博士に擲つて、「汝我等が御主関の御名をもつてこの毒蛇より喰らはれ、死せずして大きな苦しみを受け、大音をあげて叫ぶべし」と、宣へば、その毒蛇博士に喰らひつけば、狼の如くなる声を出だすなり。〔『サントスの御作業』「サンシモン伝」〕

博士も天狗の業にて、やがてアポストロ（使徒）のその所に来たり給ふことを承り及び、害し奉るために大蛇二匹アポストロ（使徒）のもとへ遣はしければ、アポストロ（使徒）外へ出でさせられ、この蛇にクルス（十字架）を唱へ給ふとともに、羊の如くなりたるに、アポストロ（使徒）、「誰にも仇をなさずして、山へ行け」と下知し給ふなり。〔『サントスの御作業』「サンマテウス伝」〕

聖人たちを取り締まる「奉行」に「博士」が登用されることもある。彼らはキリシタンに対する迫害者の手先となり、キリシタンに拷問を加えることすらあった。

さてその奉行には博士（*los encantadores* 魔術師）を定めた

るものなり。さればかやうの輩は別してキリシタンの向かうざすなるが故に、事に左右をよせて非道を行ふこと兩の降るがごとし。終にはかのビスポ（司教）を捕へ奉つて、悪王の前に引きたるものなり。（「ペルシャといふ国に於てサポルといふ悪王の時代にありしベルセクション（迫害）のこと」）

されば何と禁制せらるるといへども、近臣の中にもキリシタン数多あるが故に、悪王もこれを以て宸襟を悩まざるものなり。それを如何にといふに、数輩のキリシタン玉顔に咫尺せるによつて、進退にしわづらひ、少し怒りをなだむる体なり。それによつて自今以後はキリシタンのサセルドウテ（司祭）の司々ばかりを訣すべしとの制法を出だし、その奉行には博士（*Los agoreros y pontifices de los templos* 占い師や神殿の神官）を定むるものなり。されば彼等は在々所々を尋ねめぐり、ビスポ（司教）サセルドウテ（司祭）と名を得給ひたる貴僧高僧を数多引き具し奉るものなり。（『サントスの御作業』「サンシメオン伝」）

然れば博士（*Los agoreros* 占い師）はこの善人に種々の御苦痛を与へ奉るといへども、ヒイデス（信仰）は少しもたぢろき給はぬ故に、その由悪王に奏すれば、「さらば先づ日輪を拝ま

せよ、否と言はば、首をはねよ」との下知にまかせ、この由をサントへ申せば、「御作者に当り奉る敬ひをいかでか御作のものにはあてがふべき？」と、堅固に返答し給ふものなり。それによつて種々の御苦しみを以て終に害し奉るものなり。（『サントスの御作業』「サンシメオン伝」）

しかし、「博士」は最後にはキリシタンに屈服することになる。敵対したまま不慮の死を迎えるものもあれば、キリシタンに改宗するもの、あるいは殉教者の列に入ったものもいた。

アポストロ（使徒）、「ヒレトはここに居ければ、何とて連れて行かぬぞ」と宣へば、「その御家中にある蟻にも手をかくること叶はず」と申すなり。その後アポストロ（使徒）ヒレトに、「我等に対して仇をなす者に良き事与ゆる為に汝を搦めけるエルモゼネスを解き許されよ」と、宣ふが故に、解き許されれば、万民の前に面目を失ひけるなり。アポストロ（使徒）かの博士に、「御主はまげて人より御奉公を望ませられねば、汝のままにいづくへなりとも行け」と宣へば、博士の曰く、「我天狗の大きなことを弁ゆれば、それより殺されぬ防ぎ道具を与へ給へ」と。その時アポストロ（使徒）御杖を与へ給へば、それを持ちて我が所まで無事に帰りて、あるほどの経を取つて

アポストロ（使徒）へ参り、「焼き給へ」と捧げ、御足元にひれ伏して、「いかにアニマ（魂）の御助け手、我がペニテンシヤ（受苦）を受け取り給ひ、今まで御身に敵をつかまつりける者を御弟子の中に加へ給へ」と歎き申すなり。エルモゼネスキリシタンになりて、あるほどの経を海に投げ捨て、大きなデウスの御被官となり、ゼズキリシトの御名をもつて数多の奇特をあらはすなり。『サントスの御作業』「サントジャコブメヨル伝」

サンシリヤコビスボ、マルチル（殉教者）になり給ふ日は五月四日なり。このベヤト（福者）をばジュリヤノ悪王より片手を切り奉り、とらかしたる鉛を御口に入れ奉るに、この御苦みをこらえ給ふ事を、人々見て、仰天するもの也。それより鉄にて打ちたる床にうつぶしになし奉りて、下より猛火を以て苦め奉る也、その折節に御うしろをなさけなく打擲し奉り、御疵の上に鹽をまき、油をたぎらかして滴らかし奉る也。権門は、このベヤトのかほど強き御心を見れば、又籠へ返し奉る也。アナと申す御母も、是れ又善人にてまませば、御子の御色身よりも、御アニマ（魂）を用ゐ給ふに依つて、キリシトの御大切に催され、マルチリヨ（殉教）の為に強き心を御子に勧め給ふ也。御母も同じく籠者の身なれば、御子になし給ふ御異見を権門聞い

て、アナの両の御脇に、焼きたる鉄の板をあてさせ奉る也、御髪を縄の如くにしてつり上げ、果して御首を打ち奉る也。サントをば毒蛇を集め置きたる堀に入れ奉るに、この毒蛇、サントを敬ひ奉るしるしとして仇をなし奉らぬ也。アモニヨといふ博士 (vn hechizero 魔術師) 之を伝へ聞いて、キリシタンになり、ヒイデス（信仰）に帯して同じ座にてマルチル（殉教者）になりたるもの也。サントは少しも弱はり給はざる事を見て、たぎりたる油の中に入れ奉り、終に銚を以て貫き奉れば、この道より天の宝冠を得給ふ也。『ヒイデスの導師』

「博士」とは以上のように「魔術」「魔法」を用いて障碍をなす存在だった。したがって、争闘の果てに改宗したものはともかくとして、あくまでも「博士」の位置にとどまっているかぎり、イエスの生誕を祝福するという行為にふさわしくない。

七

東方の三博士 Magus を「国司」と翻訳したのは、それを「帝王」とするヨーロッパの伝統にのっとったものである一方、「博士」と訳さなかったのは、日本語の「陰陽師」を意識しつつ「博士」をキリシタンの敵対者と措定したため、三博士だけを例外として特権的な地位を与えなければならなかったからである。

たとえ至高の權威を有する聖書の一節であっても、いわゆる逐語訳ではかえって誤解を招く可能性がある。キリシタンの翻訳は、日本の錯綜した宗教状況をふまえたうえで仏教用語をはじめとして他の宗教のこまごまを換骨奪胎しながら、あらたな文脈を作り出していく試行錯誤の連続だった。それは宣教師たちが直面していた異文化接触の局面を映し出すもうひとつの鏡でもあった。

注

- (1) 久保尋二『「マギの礼拝」図像研究——西洋美術のこころとかたち——』すく書房、一九九〇年。
- (2) 『聖書 新共同訳』日本聖書協会、一九八七年。
- (3) 山田俊雄翻字「バレット写本」『キリシタン研究』第七輯、吉川弘文館、一九六二年。
- (4) *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*. Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1983.
- (5) ジェイムズ・ホール『西洋美術解説事典』河出書房新社、一九八八年。
- (6) H・チースリク、福島邦道、三橋健解説『サントスの御作業』勉誠社、一九七六年。福島邦道『サントスの御作業 翻訳研究篇』勉誠社、一九七九年。括弧内は、Fray Luis de Granada, *Segunda parte de la introduction del simbolo de la fe*, Salamanca, 1588. (豊島正之氏蔵)。
- (7) 鈴木博編『キリシタン版ヒイデスの導師』清文堂、一九八五年。姉崎正治『切支丹宗教学』姉崎正治著作集第五卷、国書刊行会、一

九七六年。尾原悟編著『ヒイデスの導師』教文館、一九九五年。括弧内は、Fray Luis de Granada, *Quinta parte de la introduction del simbolo de la fe*, Salamanca, 1588. (豊島正之氏蔵)

- (8) 福島邦道『ぎや・ど・ぺかどる』勉誠社、一九八一年。豊島正之編『キリシタン版ぎやどぺかどる 本文・索引』清文堂、一九八七年。括弧内は、Fray Luis de Granada, *Guia de peccadores*, Salamanca, 1573. (大英図書館蔵)

- (9) 新井白石著、宮崎道生校注『新訂 西洋紀聞』附録——『西洋紀聞』関係史料「一三「岡本三右衛門筆記」」平凡社東洋文庫、一九六八年。

- (10) 新井白石著、宮崎道生校注『新訂 西洋紀聞』平凡社東洋文庫、一九六八年。

- (11) 潜伏キリシタンの持っていた『天地始之事』については、フランシスク・マルナス『日本キリスト教復活史』久野桂一郎訳、みすず書房、一九八五年、田北耕也『昭和時代の潜伏キリシタン』日本学術振興会、一九五四年、紙谷威広『キリシタンの神話的世界』東京堂出版、一九八六年、参照。『天地始之事』では、三博士の来訪の部分はつきのように記されている。「しばらくありて、つるこの国の帝王めんてう、めしこの国の帝王がすばる、ふらんこの国帝王ぼうとさる、此三人御告をかふむりて、出たゝせたもふ所、道すがら、段々に候得ども、ふしぎをかふむり、三方の道にて一しよにゆきやい、つりようて連れ立たもふ。其時指南の星を目当として、べれんの国をぞつきにけり。」(『天地始之事』、海老沢有道、H・チースリク、土井忠生、大塚光信『キリシタン書 排耶書』日本思想大系、岩波書店、一九七〇年)。

- (12) 山田俊雄翻字「バレット写本」『キリシタン研究』第七輯、吉川弘文

- 館、一九六二年、脚注。
- (13) 亀井孝解題『日葡辞書』勉誠社、一九七三年。土井忠生、森田武、長南実編訳『邦訳 日葡辞書』岩波書店、一九八〇年。
- (14) 福島邦道・三橋健解題『羅葡日対訳辞書』勉誠社、一九七九年。
- (15) 山田俊雄翻字「バレット写本」*Passio Domini nostri Iesu Christi* (われらが主ゼズ・キリストの御受難)『キリシタン研究』第七輯、吉川弘文館、一九六二年。「内は、『スピリツアル修行』「御主ゼズキリストの御バツシヨンのこと」(注(3)) 前掲書所収。)
- (16) *BIBLIA SACRA IUXTA VULGATAM VERSIONEM*, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1983.
- (17) 鈴木広光、梅崎光、青木博史「バレット写本所収福音書抄註解(一)」、『文学研究』第九十四輯、一九九七年。
- (18) 日本古典全集『きや・ど・へかどる下巻 妙貞問答 破提字子頭偽録』日本古典全集刊行会、一九一七年。
- (19) 大塚光信『コリヤードさんげろく私注』臨川書店、一九八五年。大塚光信校註『コリヤード懺悔録』岩波文庫、一九八六年。
- (20) ヤコプス・デ・ウォラギネ、前田敬作・今村孝訳『黄金伝説』1「聖ペテロの教座制定」注(九)、人文書院、一九七九年。
- (21) 括弧内は、Fray Luis de Granada, *Segunda parte de la introduccion del symbolo de la fe, Salamanca*, 1588. (豊島止之氏蔵)。